

赤十字NEWS

January 2012 Vol.860
http://www.jrc.or.jp



編集・発行 / 日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

CONTENTS

TOPICS 2

石巻夜間急患センター開設
第31回国際赤十字・
赤新月国際会議

TOPICS 3

フローレンス・ナイチンゲール記章
受賞記念講演会
第6回いのちと献血
俳句コンテスト
はたちの献血キャンペーン
理事会審議報告
常任理事会開催報告

SPECIAL 4 5

広報特使・藤原紀香さん
近衛社長と新春対談
～世界からの支援を糧に～

AREA NEWS 6 7

北海道・大阪・香川・福岡
全国学生クリスマス
献血キャンペーン
海外たすけあい
昭憲皇太后基金のお知らせ
Voice & プレゼント

WORLD 8

「教育こそが最高のプレゼント」
南スーダンで看護支援
H&Mがモンゴルへ
17万点の衣類を寄贈
モルディブ赤新月社誕生



「赤十字の輝きをもっと大きく」 明日への決意を表明

「被災地、被災者の皆さんへの思いを風化させてはいけない」「世界を見据えた活動を強めていかなければ」—新しい年を迎えるにあたり『赤十字新聞』では、赤十字広報特使の藤原紀香さんと日本赤十字社・近衛忠輝社長との対談を企画しました。二人は、東日本大震災に際し国内外から寄せられた支援への感謝とともに、日赤がこれから果たすべき責任と役割にも言及。震災の被災者支援はもとより、世界に山積する人道課題に取り組んでいく決意を表明しました。
(二人の新春対談は4、5面に掲載)

クロスアップひと



読売ジャイアンツ
はやと
坂本勇人選手

「あきらめずに頑張って」被災者へエール

高校時代の3年間を東北で過ごした坂本選手。それだけに東日本大震災には心を痛めたといいます。「被災者の皆さんを思い、とても辛かった。自分にできるのは一生懸命野球をやること。その姿を見て欲しいと、精一杯プレーしました」と昨年を振り返ります。
読売巨人軍赤十字支援プロジェクトのリーダーとして11月には、自らデザインしたチャリティートートバックの売上金287万円余りを日赤に寄付。寄付金は坂本選手の思いをく

み、被災地復興に役立てられる予定です。「大変な状況は続くかもしれませんが、あきらめずに頑張ってほしい」と被災者にエールをおくります。
赤十字支援プロジェクトでは、児童養護施設の子どもたちを試合に招待する「坂本シート」の取り組みも。その活動について話を聞くと「坂本シートに来てくれた子どもたちの応援が本当にうれしい。僕の方が勇気づけられています」と笑顔を見せてくれました。

PROFILE

1988年12月14日、兵庫県生まれ。青森県八戸市の光星学院高校3年生春に06年の選抜高等学校野球大会に出場した。同年秋のドラフトで1位指名を受け07年に読売巨人軍入団。2年目からレギュラーの座を獲得する。09年から赤十字支援プロジェクトのリーダーに。—昨年のチャリティーTシャツの売上金の寄付は毛布の購入代金に充てられ、昨年11月に福島県内の仮設住宅に配付された。

石巻市夜間急患センター開設

海外からの救援金で日赤が建設支援 「市民の大きな安心に」

日本赤十字社の支援により建設が進められていた仮設石巻市夜間急患センターが先頃完成し、昨年12月1日より診療を開始しました。石巻市内の医療機関は震災で大きなダメージを受けましたが、その復興の一步となるもの。同日行われた開所式では、同市医師会の外眞一会長が「冬場に増える夜間急患に対応できる施設は、市民の大きな安心感になる」と期待を寄せました。

石巻市立病院に隣接して建てられていた夜間急患センターは震災前、年間約1万5000人の患者を市内外から受け入れていましたが、東日本大震災の津波で1階が冠水。その機能を喪失していました。日本赤十字社では、同急患センターの早期再建が市の医

石巻日赤への急患集中の解消にも期待

療復興に不可欠との石巻市や地元医師会からの支援要請を受け、海外救援金を財源に建設を担った日赤が、東日本大震災の津波で1階が冠水。その機能を喪失してしま



夜間急患センターは主に入院の必要性のない軽度の患者を診察

は2階建ての鉄骨造りで、延べ床面積718平方メートル。診療科目は内科、小児科、外科でCTスキャンや超音波診断装置などの診療設備を備えています。



石巻市日和が丘の中央公民館に隣接する仮設急患センター

石巻地域を中心に今後も医療復興をサポート

海外救援金による復興支援事業

東日本大震災で世界から寄せられた468億円(昨年12月15日時点)にのぼる海外救援金を財源に日本赤十字社では医療、福祉、介護、教育など幅広い分野での復興支援事業を展開中。その一つが石巻医療圏を中心とした医療インフラの復興・整備です。今回、開設された夜間急患センターの建設支援のほか、

原子力災害の被災者救援を

国際赤十字・赤新月社連盟総会で決議

国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC、会長II近衛忠輝)日本赤十字社社長は11月23日から25日にジュネーブで開かれた第18回総会で、IFRCや各国赤十字社が原子力災害時の被災者救援に役割を果たすことなどを盛り込んだ決議を採択しました。

決議に「原子力災害への対応」が盛り込まれたのはIFRC総会初。その背景には、「およそ30カ国が400基以上の原子力発電所を保有する中、不測の事態に備えるには赤十字を含め、国際的な枠組みでの備えが必要」という大震災以前からの近衛会長の強い危機感がありました。

災害対策で求められる役割

2年前の総会で確認された「連盟2020年戦略」にかかわる取り組みも総会の大きなテーマとなりました。同戦略は「災害救援・復興」「健康で安全な生活」「非暴力文化の促進」の3つを柱とする。総会では、「災害救援・復興」にかかわりハイチ大地震や東日本大震災で赤十字が果たした役割と教訓の共有化を討議。①各社は政府と協議し、災害対策分野でも役割を果たす②災害ボランティアのリスク軽減策に取り組む、などが決議されました。

核兵器の使用禁止を赤十字代表者会議で訴える

総会に続き11月26日に開催された「国際赤十字・赤新月の作成段階から関与。また、運動代表者会議」では、核兵器の問題が焦点に。「核兵器の使用は国際人道法上、受け入れがたいものであり、赤十字として核兵器の使用禁止を強く訴える」との決議が取り



日赤フランスを訪れたロシア赤十字社のアガバ氏。「震災被害のすさまじさに心を痛めている。一日も早い復興を願っています」

第31回赤十字・赤新月国際会議 国際災害対応法や国際人道法の強化に向けて

各国の赤十字社とIFRC、ICRC、ジュネーブ条約加盟国政府が世界の人道問題について討議する4年に1度の会議も開催されました。「第31回赤十字・赤新月国際会議」(11月28日〜12月1日、ジュネーブ)です。日本政府は同会議で発言し、IFRCが策定した今回の中心テーマは「国際人道法の強化」「IDRLの強化」「地域での人道活動の強化」「保健医療の強化」の4つ。IDRLの議論の中で日本政府は、東日本大震災の経験を踏まえて「IDRLガイドラインに促した国際支援の重要性を改めて認識」と表明。続けて発言した日赤は「国際支援がIDRLガイドラインに流れる人道、中立、公平の原則ののっとり実施されることが重要」と訴えました。

参加者の多くが日本での震災について言及し、災害対策の重要性を確認した



この提案に対し、チェルノブイリ原発事故を経験したウクライナ赤十字社は「原発とのかかわりは、人類が一つになり考えていくべき課題」と賛同。各国の赤十字社や赤十字国際委員会(ICRC)からも賛成意見が寄せられました。決議は、原子力災害への対応が「連盟2020年戦略」での災害対応の重要な一部であるこ

フロレンス・ナイチンゲール記念章授章記念講演会

「災害看護」「在宅看護」

バイオニアが講演

看護師に与えられる世界最高の栄誉「フロレンス・ナイチンゲール記念章」を昨年受賞した南裕子・高知県立大学学長兼高知短期大学学長と、村松静子・在宅看護研究センター代表の記念講演会が12月10日、東京・広尾の日本赤十字看護大学で開催されました。赤十字看護大学・短期大学や看護専門学校、看護関係者など600人が参加し、先輩2人の話に耳を傾けました。

「災害看護学の発展に向けて」

高知県立大学学長 南 裕子さん
兼高知短期大学学長



災害看護学の必要性が認識され、1995年の阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件でした。二つの出来事を契機に赤十字の皆さん

災害看護学の必要性が認識され、1995年の阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件でした。二つの出来事を契機に赤十字の皆さん

「私と看護（可能性への挑戦）」

在宅看護研究センター代表 村松静子さん



始めた当初は、医師の指示がなければ医療機材が使えないなど制約が多かった在宅看護です。もちろん今も制約はあります。でも私たちは、自

分の手と、看護のプロとして磨いてきた勘でそれらをか

いのち讃えた17文字

第6回いのちと献血俳句コンテスト

36万句から15作品を表彰

俳句を通じて献血やいのちの大切さを知ってもらうことを目的に、日本赤十字社が主催した「第6回いのちと献血俳句コンテスト」の表彰式が12月3日、日本赤十字社で開かれました。

- ◆受賞作品（上位10作品）
- ・厚生労働大臣賞
献血の 手帖も遺品 秋灯下
(大阪府 松野すみえ)
- ・文部科学大臣賞
小鳥来て 献血車来て 五時限目
(茨城県 伊波久世)
- ・日本赤十字社長賞
ふりりんが チリンと鳴れば 父帰る
(広島県 坂井未希)
- ・ゲスト審査員賞
退院の 父が見上げた 秋の空
(栃木県 大川藍)
- ・ピカチュウ賞
雪だるま 小さくなって 春をまつ
(青森県 下浅空汰)
- ・最優秀賞（小学校低学年の部）
なすのうし じいじをちゃんと おくってね
(山梨県 長阪優月)
- ・最優秀賞（小学校高学年の部）
川の字で みんなでねたよ おおみそか
(神奈川県 河内拓海)
- ・最優秀賞（中学生の部）
祖父はいない 雪降りつもる あの日から
(石川県 廣崎凌成)
- ・最優秀賞（高校生の部）
春風の やうに座席を 譲りけり
(愛媛県 山下舞子)
- ・最優秀賞（一般の部）
初めての 献血パバに なった冬
(愛知県 野田美和子)



審査員長の 審判を語る 審判員長の 審判を語る

鳥来て 献血車来て 五時限目」と詠み、文部科学大臣賞を受賞。「震災を体験して、自分も何かしたいという気持ちになっていました。献血は最初怖かったけど、やってよかったです」と笑顔で語りました。

今回の応募総数は東日本大震災の影響で昨年より減少したものの、全国から約36万句。その中から15作品に、厚生労働大臣賞、文部科学大臣賞、日本赤十字社長賞などが贈られました。審査員長は俳人の黛まどかさん、ゲスト審査員は学生献血応援キャラクターでもある女優・南沢奈央さんが務めました。

厚生労働大臣賞に選ばれたのは、大阪府の松野すみえさんの作品「献血の手帖も遺品 秋灯下」。義兄の遺品整理で出てきた献血手帳を、姉が愛おしそうに見つめていた姿を見て浮かんだといいます。松野さんは「この句が献血推進に役立ってくればうれしい」とコメントを寄せました。

入選者のみなさん



からだひとつでできる ボランティア

「はたちの献血」キャンペーンスタート

石川遼選手が呼びかけ

成人を迎える若者を中心、現在20歳の石川選手が「献血への理解と協力を呼びかける『はたちの献血』ボランティアです」と力強く呼びかけます。

から2月29日まで全国で実施されています。

広報キャラクターは3年連続でプロゴルファーの石川遼選手。



天皇后両陛下から 御下賜金

12月14日、天皇后両陛下から、この御下賜金は、災害等による被災者救援事業のための資金として有意義に使用されます。

理事会審議報告

平成23年11月14日、理事会に文書による付議が行われ、審議結果は左記のとおりです。

- 1 予算の補正について
(名古屋第二赤十字病院の土地の取得にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正)
- 2 付議事項
1 予算の補正について
(名古屋第二赤十字病院の土地の取得にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正)
- 3 資金の借入について
(山梨赤十字病院の電子カルテシステム導入にかかる資金の借入)

常任理事会開催報告

平成23年12月16日、本社において平成23年度第8回の常任理事会が開催されました。審議結果は左記のとおりです。

- 1 規則の改正について
(日本赤十字社職員給与要綱等の一部改正・日本赤十字社常勤役員の報酬等の一部変更)
- 2 予算の補正について
(クウェート国からの原油無償提供による東日本大震災復興支援事業にかかる一般会

赤十字広報特使 藤原 紀香さん 平成24年新春対談 日本赤十字社 近衛 忠輝社長



世界からの支援を糧に 世界を意識した活動を

東日本大震災での救護活動や復興支援活動、義援金募集の取り組みなどで昨年は日本赤十字社にかつてない注目が集まりました。その活動経験のうえに、日赤がさらに何を目指していくのかが問われています。新春にあたり赤十字広報特使の藤原紀香さんが近衛忠輝社長を訪問。昨年をふりかえるとともに今年の抱負を語っていただきました。

近衛社長（以下近衛） 新年あけましておめでとうございます。
藤原紀香（以下藤原） あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いたします。
近衛 昨年は、東日本大震災という私たちがかつて経験したことのない災害が発生し、日本赤十字社にとってその真価が問われる一年になりました。また、藤原さんにも広報特使として、またボランティアとして被災地に何度か足を運んでいただきました。
藤原 石巻市を皮切りに計5回、被災地を訪問させていただきましたが、4月中旬に石巻の街を高台から見た時の光景がいまだに忘れられません。涙があふれ、本当に言葉が出てきませんでした。「泣いてちゃいけない。今、一人の人間として何かをしなくては…。でも何ができるのだろうか」と真剣に悩みました。
近衛 あの状況で何ができるのか、何をすべきなのかは実は日赤にとっても大変難しい問題でした。行政自らが被災し、通信機能も麻痺。正確な被災状況の情報は入ってこなかったからです。ですから、現地足を運びニーズを確かめ、医療でも救護でもとにかくやれることからやろうと。日赤の活動もそこからのスタートでした。

手探りで進めた被災者支援

藤原 でも、被災地へいち早く支援物資を搬送するなど日赤の活動にはさすがと思わせる部分がたくさんありました。救護活動や被災者の健康対策、こころのケア、家電セット配付なども本当に喜ばれていたと思います。
近衛 それはありがたいことですが、もっとできたのでは、という気持ちもあるのです。自らニーズを判断し、自分たちで決めて、動かなければならない。日赤としても初の経験でしたから、不十分な点があったとは言えない。また、義援金の配分ではさまざまな批判もいただきました。
藤原 被災者の生活再建や街の復興が進まないことへの国民のフラストレーションが日赤へ向いてしまった側面も



4月13日、岩手県石巻市内の小学校に避難されている方々の元へ

あるのではないのでしょうか。また、義援金配分の際の「公平」の原則などを情報が少ない中でどう担保していくのかといった難しさもあったと聞いています。
近衛 被災者のみなさんは、それぞれ苦勞をされていて、悲しい思いをされている。それを「この人の被害は軽い」「あの人の被害の方が重い」とは簡単にはさばけない問題がありました。救護の対象とする被災者の特定や義援金配分には地元行政との密接な協力が不可欠ですが、そのあり方にはさらに工夫が必要だと思います。

「世界の人の心に届いていた日赤の支援」 藤原

「貧しい国の子どもたちの支援に感動」 近衛

藤原 東日本大震災では世界中の人たちからの支援やメッセージが届けられました。私が行っている「スマイルプリーズ世界子ども基金」にも女優のジョディ・フォスターさん、プロゴルファーのマキロイさんなど数多くの海外の友人が被災地支援への賛同を寄せてくれました。日赤への海外からの支援もかつてない規模と聞いています。
近衛 海外赤十字社を通じて日赤へ寄せられた海外救援金は昨年12月15日時点で約468億円にも達しました。でも、お金の多寡ではなく、それぞれの国の市民が精一杯の気持ちを示してくれた。それが嬉しかったです。ある途上国では子どもたちが少ない小遣いを募金してくれて、それを送ってくれました。
藤原 素敵なエピソードですね。昨年、テレビ番組「地球VOCE」でインド洋のモルディブ諸島を取材したのですが、彼らは国民の倍の数のツナ缶を送ってくれました。しかも、被災地でも簡単に開けられるようにと、工場の製造ラインを変更して、同国では一般的ではないプルトップ缶を作ってくれたんです。
近衛 そうですか。本当にありがたいお話です。実はモルディブは昨年暮れに赤新月社が結成されたばかりで、昨年の国際赤十字・赤新月社連盟の総会で187番目の加盟社として認められたんですよ。

お金どもの支援だけではなく

藤原 仕事で海外に行くことも多いですが、こうした国々の人からお話を聞くと皆さん様に「スマト島沖地震・津波災害で助けてもらった」とおっしゃられます。これまで日赤や日本政府のやってきた支援活動が、それぞれの国



の皆さんの心に届いていたんだと実感します。
近衛 まったく同感ですね。今回の震災で日本は海外に支援を求めたわけではない。それに関わらず、世界中の人々が手を差し伸べてくれた。
藤原 広報特使としてケニア、バングラデシュなど日赤の海外支援地取材に行かせていただいているのですが、そこで感じるのは「日赤の支援はお金と物資だけじゃない」ということです。日赤の駐在員が人々の自立につながるよう、その土地の文化、風習を乗り越え、地をほうような努力をされています。
近衛 今回の東日本大震災への海外からの支援を見ると、日赤が果たしてきた役割が評価されていると感じます。

「風評被害の苦勞を痛感」 藤原

「原爆と原発事故、二つの被害を経験した国の責任」 近衛

藤原 福島第一原発の事故でも日赤はさまざまな活動を展開されたと聞いています。
近衛 当初は被害実態がつかめませんでしたから、日赤の医療班ですら被ばくを心配しながら現地に行く状況でした。そうした中で、避難所での救護活動や警戒区域へ

一時帰宅される住民の健康管理などを行ってきました。
藤原 10月下旬に福島県相馬市と浪江町の皆さん方の仮設住宅を訪問したとき、お会いしたお婆ちゃんが「大変だけどみんなが助けてくれるから、乗り切れるんだよ」と笑顔を見せてくれました。ところが、別れ際に私の肩を抱いたお婆ちゃんが目から大粒の涙が溢れてきて…。本当に苦勞されているんだと実感しました。
近衛 将来の見通しが立たないことが一番苦しいと思います。いつ故郷に帰れるのか。子どもたちの健康は大丈夫か。それに対して、誰も正確な答えを示していません。

原発事故救護に国際的ガイドラインを

近衛 そういう状況を踏まえすと、赤十字が健康を守る人道的な立場から客観的な情報を提供したり、事故が起きる以前から教育や啓発活動を行うことができないだろうかと考えています。
藤原 昨年の赤十字国際会議でも議論になったそうですね。
近衛 原爆被害と原発事故。唯一両方を経験した国の赤十字社の責任として提起しました。世界の30カ国に400基の原発があります。どこで事故が起きても不思議ではありません。放射線被害から住民を守るためのガイドラインを作成することが大切だと訴えました。

藤原 各国の反応はいかがでしたか？
近衛 実は赤十字の会議では核兵器の使用禁止や廃絶を訴える決議が採択されたのですが、核保有国の赤十字社は政府の方針もあってか、ほとんどこの問題には沈黙をしていました。それに対して、原発事故に関わる決議には「原発がある以上、事故の可能性は常にある。赤十字として対策は取るべきだ」と強い支持がありました。それに向けた国際会議を今年前半に日本で開催することになっています。

「風化させてはならない未曾有の大震災」 藤原

「世界を意識した活動をこれまで以上に」 近衛

藤原 災害への救援活動や復興支援、原発事故への対応など赤十字が大きな役割を果たしていくためには、支えてくださる社員の存在がますます重要ですね。
近衛 国民全体で赤十字をサポートしようということでも生まれた社員制度です。国民の日頃からのご支援がなければ、われわれはいざという時の活動ができません。今回の災害救護活動や義援金の受け付けにも膨大な経費がかかりましたが、それは社員の皆さんからの社費があればこそだったのです。
藤原 私も社員6年目になります。「社員」と呼ばれることで赤十字を支える自覚も芽生えます。これからも社員であり続けたいし、広くこの制度を伝えていきたいですね。
近衛 社員制度とあわせてボランティアの皆さんの自主的な活動をもっとサポートすることにも力を入れていきたいと思っています。実は世界各国の赤十字のなかで病院

経営などを行っている赤十字は少数で、ボランティア活動こそが赤十字の生命です。そうした視点を大切に、ボランティアの皆さんが活動しやすい環境づくりにもっと力を注ぐべきだと感じています。
藤原 被災地では多くの奉仕団の方々とお会いしました。「ホットタオル」を使ったリラクゼーションなど、生活の智慧を活かした活動をされていて、みなさんに喜ばれていました。私も微力ですが被災地を訪問してのボランティア活動を今年も続けていきたいと思っています。また、震災から時間が経過すると被災地、被災者のことは忘れられがちになりますが、絶対に風化させてはいけない。私も一緒に頑張る決意です。

赤十字だからこそできること

近衛 最後に私どもの決意も申し上げたいと思います。東日本大震災や2年前のハイチ大地震など巨大災害が毎年のように世界を襲っています。また、昨年の「アラブの春」のような政治的混乱の際も、赤十字だけは政府との信頼関係を築きながら中立性を保ち、国民の支持と海外からの支援があって活発な活動を展開することができていました。赤十字ならではの活動が要求される状況が今後もますます広がってくるでしょう。こうした時代にあって私たち日赤もこれまで以上に世界を意識した活動を展開していきたいと思っています。
藤原 そうした世界での日赤の活動を広報特使としてまたぜひ取材させていただき、それを日本のみなさんにフィードバックする役割を果たさせていただければと思います。
近衛 海外取材についてはいくつか候補もありますのでぜひお願いしたい。本日はどうもありがとうございました。
藤原 こちらこそ、ありがとうございました!

藤原紀香さんレポート

2007年から赤十字広報特使。東日本大震災が発生した3月11日は座長を務めるミュージカル「マルグリット」の初日。6日順延の後、東京と大阪で公演を行うが「こんな大変な時期に舞台をやっているのか」と悩んだことも。しかし、被災に見舞われながらも何となく見に来られたお客さんや公演を待ち望んでいた方々が大勢劇場に詰めかけ、エンターテインメントの世界にいる者の使命を強く実感。公演後は毎日、共演者とともに義援金を呼びかけ、「Smile Please 藤原紀香世界子ども基金」に集まった募金と自らの義援金をあわせて6300万円を日赤へ寄付した。3月からは主演ミュージカル「キャバレー」の公演を控え、東京公演は3月2日～18日、東京国際フォーラムホールCで行い、金沢、大阪、名古屋を巡回する。



全国各地からの総勢11万人以上の赤十字ボランティアが被災地で支援活動

青少年赤十字 加盟校6年生 人道テーマに創作劇



大阪 2011.11.12



子どもたちは授業でも人間の尊厳、国際人道法について学びました

青少年赤十字 (JRC) 加盟校の阪南市立桃の木台小学校で11月12日、6年生が人道をテーマにした劇を同校の学習発表会で披露しました。「温かさや希望を届けたい」と題したこの劇は、敗戦後の日本で「二度と原爆を使ってはいけない」と訴えた連合国軍総司令部 (GHQ) 長崎軍政部司令官ビクター・デルノアの人道的な行動を描いたものです。

演じた児童たちは保護者をはじめとした来場者に「戦争の恐ろしさやいのちの大切さを多くの人に知らせます」「いのちの大切さについて考えます」「相手の気持ちを考えて行動します」などそれぞれの思いを伝えました。

同世代の仲間同士で HIV／エイズを学習



香川 2011.11.19



同世代だから性の問題も恥ずかしがらずに真剣討議が可能

青年赤十字奉仕団香川県支部連絡協議会は11月19日、香川県支部と共催した研修会で、国内外で感染者が増えているHIV／エイズについて学ぶピア・エデュケーションを実施しました。

ピア・エデュケーションは、同世代の仲間同士が対等な立場で学び合う学習法。HIV／エイズなどに絡む問題の学習に効果的な方法といわれます。グループに分かれて感染予防の方法や性についての情報を語り合った参加者からは「HIVについて知っているつもりだったが、間違っていて覚えていることもわかった。正しい知識が得られてよかった」などの感想が聞かれました。

福岡県日赤紺綬会 常陸宮妃殿下が おことば



福岡 2011.11.18



有功章は常陸宮妃殿下から受章者に贈られました

福岡県日赤紺綬会第52回総会が日本赤十字社名誉副総裁常陸宮妃殿下をお迎えして11月18日、福岡市内で開催されました。総会には、紺綬会員や赤十字関係者など約540人が出席。支部へ多額の社資 (寄付) をお寄せいただいた方や紺綬会の発展に功績のあった方へ、金色有功章などの贈呈を行いました。

常陸宮妃殿下は「全国に先駆けて結成された福岡県日赤紺綬会が、現在も着実な歩みを見せていることは、誠に喜ばしいことと思います。本日の総会を契機としてより一層充実した活動を進められるとともに、赤十字活動に参加する人々の輪が広がっていくことを願います」とおことばを述べられました。

子ども若者育成支援 日赤が内閣府大臣表彰



2011.11.22



蓮舫内閣特命担当大臣から表彰状が授与されました

子どもたちの健やかな成長を支える活動に顕著な功績があったとして、日本赤十字社が平成23年度「子ども若者育成・子育て支援功労者表彰」を受賞。昨年11月22日に総理官邸で行われた表彰式で、子ども・若者育成支援部門の「内閣府特命担当大臣表彰」を贈られました。

同表彰は、「子ども・子育てビジョン」(平成22年1月閣議決定) や「子ども・若者育成支援推進法」(同4月施行) を踏まえて、平成22年度に創設されました。日本赤十字社の受賞は、青少年赤十字 (JRC) による「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」などの長年にわたる活動が評価されたものです。

全国学生クリスマス 献血キャンペーン

学生ボランティア団体がいっせいに献血を呼びかける「全国学生クリスマス献血キャンペーン」が行われ、各地で趣向をこらしたキャンペーンが展開されました。

白銀一色となった札幌では、みんな鼻を真っ赤にして献血をPR (北海道)



山形県と初めての合同実施で、献血150人達成 (福島)

会場を盛り上げるサンタのコスチューム (大分)



大阪府赤十字大会 高円宮妃殿下から 有功章



大阪 2011.11.15



大会では東日本大震災の救護活動報告も行われました

平成23年度大阪府赤十字大会が11月15日、日本赤十字社名誉副総裁高円宮妃殿下ご臨席のもとNHK大阪ホールで開催され、赤十字奉仕団員など約1100人が参加しました。

大会は、赤十字活動に多大な貢献をされた方々へ、感謝の意を伝えることが目的。赤十字活動資金として多額の社資 (寄付) を寄せられた社員 (会員) や赤十字活動に顕著な功労があった方々に対し、高円宮妃殿下が有功章を授与しました。あわせて、日本赤十字社長感謝状、大阪府支部長表彰状・感謝状がそれぞれ代表の方々に贈られました。

赤十字スキーパトロール 誕生50周年記念



北海道 2011.11.27



建立されたモニュメントの前で安全なスキーへの誓いを新たにしました

北海道赤十字スキーパトロール誕生50周年を記念して、同記念モニュメントの除幕式が11月27日、小樽市の朝里川温泉スキー場で行われました。

赤十字スキーパトロールは昭和36年に同スキー場で奉仕団が活動を始めたのをきっかけに誕生。現在では道内で49のスキーパトロール奉仕団が活動しています。

当日は道内から約100人の関係者が参列。同スキー場センターハウス前に建立されたモニュメントの前に、参加者は雪上での安全を誓い合いました。

海外たすけあい 全国で街頭キャンペーン あたたかな支援で寒さ吹き飛ばす

「紛争や災害で苦しむ世界の人へ支援をお願いします」
—日本赤十字社とNHKの共同で昨年12月1日から25日まで取り組まれた「海外たすけあい」。全国でさまざまなキャンペーン活動が展開され、赤十字奉仕団員や青少年赤十字（JRC）加盟校の児童・生徒など多くのボランティアが街頭で寄付を呼びかけました。

大阪 朝ドラヒロインも「絆」訴え

NHK大阪放送局で開かれたオープニングイベントには、朝の連続テレビ小説「カーネーション」のヒロイン尾野真千子さんが登場。「支援を必要としている方と応援する方との絆が大切です」と訴えました。



「春よ来い」を全員で大合唱

香川 総勢160人で街頭活動

地域奉仕団や青年奉仕団、JRC加盟小中高校の生徒など総勢160人が街頭キャンペーンを繰り広げ、JR高松駅前など市内3カ所で募金を呼びかけました。



参加した生徒は「呼びかけた人が募金をしてくれたときはすごく嬉しい」と笑顔

宮崎 園児も元気に寄付呼びかけ

JRC加盟保育園である江平保育園の園児たちも、寒さを吹き飛ばす半ズボン姿で元気に募金を呼びかけました。



寒さに負けず頑張った江平保育園の園児たち

千葉 ロッテとふれあいステージ

地元のプロ野球団・千葉ロッテマリーンズ協力のもと、「ちばマリーンズハート2011」を開催。大松尚逸選手のチャリティーサイン会も行われ、300人を超す来場者の熱気につつまれました。



華やかなダンスライブで始まったふれあいステージ

Voice&プレゼント

『石巻赤十字病院の100日』に涙 塚村夕布子(広島県福山市)

献血ルーム「ばら」で東北の名産品をいただきました。こうしたかたちでも震災援助に取り組んでいるのを知り感心。11月号巻頭の「赤十字思想が支えた『石巻赤十字病院の100日』」には涙があふれてきました。

プレゼント応募方法

坂本選手プロデュースのトートバックを2名様にプレゼントします。以下の項目を明記の上、郵送・FAX・メールにてご応募ください。

- ①お名前(匿名ご希望の場合はその旨もご記入ください)
- ②郵便番号・ご住所
- ③電話番号
- ④年齢
- ⑤赤十字新聞1月号を手にされた場所(例/〇〇献血ルーム)
- ⑥赤十字新聞へのご意見・ご感想や、扱ってほしいテーマなど

●応募先

・ハガキ/〒105-8521
東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 企画広報室
赤十字新聞1月号プレゼント係
・FAX/03-3432-5507
・メール/koho@jrc.or.jp
(件名「赤十字新聞1月号プレゼント係」)

●応募締切/1月30日(月) 必着

※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



昭憲皇太后基金が 創設100周年を迎えます

昭憲皇太后基金は、明治45年(1912年)に、昭憲皇太后(明治天皇の皇后)が国際赤十字に10万円を寄付されたことから始まった日本でもっとも歴史ある国際協力基金です。今日までの100年間にわたり、世界中の災害、感染症などに苦しむ人々の救済や、福祉の増進、防災や病気の予防などの活動に充てられてきました。



同基金は平成24年に創設100周年を迎えます。日本赤十字社では、この機会に引き続き一人でも多くの人々のいのちと健康が守られるよう、基金の増額を図ります。募集期間は平成24年1月1日～平成25年4月11日までです。

■お問い合わせ先

日本赤十字社 組織推進部 寄付担当

(電話: 03-3437-7081 FAX: 03-3432-5507 E-mail: kотаigokikin@jrc.or.jp)



facebook に日赤公式ページができました。東日本大震災での取り組みをはじめ、とっさの手当てや献血のこと、国内外の活動現場の写真など赤十字ならではの最新情報を発信していきますので、ぜひご覧ください!
<http://www.facebook.com/japaneseredcross>



REPORT

京都第二赤十字病院 小川 里美 看護師長

「教育こそが最高のプレゼント」 誕生したての南スーダンで看護支援

20年以上続いた内戦の末、昨年7月に南スーダン共和国から独立した「南スーダン共和国」。誕生したての同国で、赤十字国際委員会（ICRC）は「紛争犠牲者支援事業」を展開しています。その一員として日本赤十字社から派遣されていた小川里美看護師がこのほど一時帰国。同国の医療事情などについて報告しました。

独立を果たした南スーダンですが大量の難民発生や国境付近での衝突など緊張が続いています。

昨年8月下旬にはナジール周辺で400人以上が死亡する大規模な武力衝突が発生。ICRC緊急外科チームが派遣要請を受け、負傷者救助にあたりました。「犠牲者の大半は女性と子ども。弱者が守られていません」と小川さんは憤ります。

荒廃した医療システムへの支援も重要な任務です。小川さんが主に活動するのは、南北スーダンの国境付近マラカルにあるマラカル教育病院。ここで外傷患者の治療や看護師教育、衛生管理指導などに携わっています。

読み書きができない看護師たち

内戦は医療に深刻な爪痕を残しています。

「地域の基幹病院なのに人材不足や設備不足が深刻。緊急手術には対応できず、メスなど医療機材の滅菌、消毒もされて

いません。看護師のほとんどは読み書き、計算ができないので、カルテは読めず、薬の量も計れない。注射も見よう見まねでやっていました」

内戦時、負傷兵や市民の救護に看護師確保は急務でした。ところが、市民の多くは内戦により教育の機会を奪われていました。その結果、最低限の教育を受けていない人たちの看護学校入学が許可されるケースが続出。読み書きのできない看護師が生まれてしまったのです。

「誤った治療・看護による事故は少なくありません。1歳になる幼児は、病院で看護師から受けた注射が原因で手が壊疽。切断することになるでしょう」

絵を使って看護指導

ICRCではマラカル教育病院のレベル向上をはかる5カ年計画を今年1月からスタート。外国人医療スタッフをこれまでの4人から7人に増強しました。「この国で病院にかかる多くの人に求められるのは、高度な医療より適切な看護。看

護のレベルアップで大勢のいのちや苦しみを救うことができる」と看護師教育にも力を入れます。

「文字が読めない看護師のために、ときには絵をかいて説明しながら指導しました」と昨年からの活動を振り返りながら、小川さんはこう期待を込めます。

「南スーダンの首都ジュバの病院でICRCは13年間支援を続けました。そのときは成果が見えてきませんでしたが、後で報告を聞くと私たちの教えたことが根



小川さんらによる衛生指導の以前は、壁には血が付着し、前の患者の血液がついたままのベッドで次の手術が行われることも (c) ICRC



マラカル教育病院の看護師たちと小川看護師（前列中央）。小川看護師は1月に再び南スーダンへ赴任する予定です (c) ICRC

づいていました。ここマラカル教育病院の看護師たちは、読み書きはできませんが、「いい看護をしたい、という思いは日本と変わりません。物やお金ではなく、教育こそが最高のプレゼントなのです」

ICRC「南スーダン 紛争犠牲者支援事業」

ICRCは南スーダンの首都ジュバに代表部を設置。紛争犠牲者への食糧配給、生活支援用品の配給、離散家族支援など幅広い事業を展開中です。南スーダン内戦が続いていた過去21年間、日赤はICRCの要請に応じて47人を派遣。資金援助（2011年度2750万円）も続けています。

H&Mジャパン

モンゴルへ 17万点の衣類を寄贈 生活困窮者へ“暖かい冬”をプレゼント



95人の園児が通うチョイバルサン幼稚園では、生活困窮者の子ども25人に衣類が配られた

横綱・白鵬や大関・日馬富士などの出身地としても知られるモンゴル。経済発展の一方で、伝統的な遊牧民の中には、異常気象による雪害で家畜を失い、苦境に喘ぐ人々が少なくありません。こうした生活困窮者を支援しようと、H&M（ヘネス・アンド・マウリッツ・ジャパン）株式会社（本社・東京都渋谷区）は、約17万点の衣類を日本赤十字社を通じてモンゴル赤十字社へ寄付しました。

異常気象で生活の糧を失う人々

マイナス30～40度にもなるモンゴルの冬ですが、加えて、「ゾド」と呼ばれる大規模な雪害に度々見舞われています。原因は地球規模の異常気象とも。その結果、遊牧民の家畜が相次いで死亡し、生活の糧を求めて多くの人が都市へ流入

する事態が続いています。

しかし、都市部にも十分な雇用はなく、流入した人々は「ゲル」という名のテントや質素な家を建てて生活。町の周辺には「ゲルエリア」と呼ばれる貧民区が拡大しています。

モンゴル最東部ドルノド県の中心都市チョイバルサンのはずれのゲルで生活するバヤルマさんは9歳と5歳の男の子の母親です。遊牧で暮らしていましたが、ゾドで全家畜を失いました。「主人は職を求めてウランバートルに行き3年経ちますが、まだ仕事を見つけられません。家畜を失いすべてが変わってしまった…」と嘆きます。

困窮者支援を担うモンゴル赤十字社

「物価は上がる一方で、貧しい人たち

の生活は益々苦しくなります。寒い季節には暖かい服を、夏には夏用の服が必要となります」と訴えるのは、モンゴル赤十字社のムグントウヤさんです。

社会福祉などの行政サービスが十分に整備されていないモンゴルにあって、生活困窮者を支える役割を担っているのが赤十字社。ゲルエリアに住む高齢者、障害者、母子家庭などへの生活支援にも積極的で、衣類や食糧支援、家庭訪問、保健衛生指導、職業訓練など幅広い活動に

取り組んでいます。

H&Mから寄贈された衣類は、各地のモンゴル赤十字社支部へ送られ、それぞれの地域の生活困窮者、災害などの被災者の元へ届けられています。

モンゴル赤十字社のミヤダグマ総務部長は「新品で非常に品質が良い。また、一部を販売してその収益を国内での輸送費や社会支援活動に充てることを了解してもらっており、大変にありがたい」と感謝の言葉を寄せています。

モルディブ赤新月社が発足 187番目のIFRC加盟社に

インド洋に浮かぶ島国モルディブに赤新月社が発足。昨年11月に開かれた赤十字国際委員会（ICRC）の総会で正式に承認され、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の総会で187番目の加盟社として迎えられました。

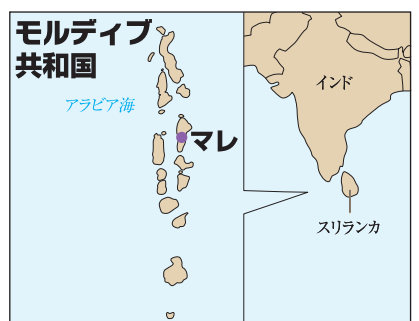
モルディブは世界的なダイビングスポットとして人気の観光地ですが、地球温暖化による海面上昇の影響を受けて、いま国全体が水没の危機にさらされています。また、2004年のスマトラ島沖地震では、津波により60人以上が死亡、2万7000人以上が被災する被害が出ました。

この災害を契機に赤新月社設立の機運が高まり、国の民主化もこれを後押ししました。

初代社長となったイブラヒム・シャヒーク氏は「津波被害からの復興はまだ途中です。今後は防災教育に力を入れるとともに、デング熱への対応、保健・衛生分野の課題解決、地域や学校を対象にし



あいさつするモルディブ赤新月社社長



た救急法の普及、青少年赤十字活動の展開、赤十字思想の普及などに取り組んでいきます」と語っています。